

ランダス著、竹永平蔵訳『強国論』再論 4

ランダスの明治維新論

近藤正臣

筆者は、故 David S. Landes の *The Wealth and Poverty of Nations: Why Some Are So Rich and Some So Poor* (1998 年著) の内容を再度考えてみようとして、「ランダス著、竹中平蔵訳『強国論』再論(1)」を『現代経済社会の諸問題——渡部茂先生古稀記念論文集』(学文社、2018) を書かせていただき、その後、「D.S. Landes の産業革命観——ランダス著、竹中平蔵訳『強国論』再論(2)——」(『経済論集』第108号)、および「ランダス著、竹中平蔵訳『強国論』再論(3)——ランダスの日本論 A」を『経済論集』第109号に書かせていただいている。やっと、ランダスの明治維新論を論じるところまできた。これまでのように、竹中訳についても気になる点には、活字のポイントを下げても触れることとする。

ランダスのこの章の最初のパラグラフはこうなっている。「日本では1867-68年に革命があった。将軍による支配は投げ出されてしまった。ほんとうに崩壊したのだ。そして、国家の管理は京都にいる天皇のところに返った。これで、千年の四分の一ほど続いた徳川の支配が終わった。しかし、日本人はこれを革命とは呼ばない。Restoration と呼ぶ。〈復興〉である。なぜなら、これは〈常態への復帰〉だったからである。中国でも革命を行ったと言う。中国では複数の王朝があったからである。日本は単一の王家をもち、そもそもの始まりに帰ったのである。」——これがランダスの明治維新の基本的なとらえ方である。

日本で最初に、天皇でなく、「将軍」と呼ばれた戦士の頭によって支配されたのは1180年代であった」と、ランダスはここで歴史をさかのぼる(1180年には源氏と平家の争いが始まり、源頼朝が征夷大将軍に任じられて鎌倉幕府ができたのが1192年であった)。「将軍」というのは文字通り、「軍を指揮する大将」のことである。いささかの断続・空位の時はあったが、この強者による支配が常態となった。これが常態となったのは、世襲の

国王というものの弱さの表れでもある。祖先は神であったという手助けがあったとしても、王朝が無限に力を持ち続けるのは楽ではなかった。弱い遺伝子、悪い結婚などがあって、力のある者が城の主となり、遅かれ早かれ、正統性をもった (legitimate な) 君主を追い出してしまうのだ。

大きなことではないが、原文で With some interruptions and interregnums, this rule by the strongest became the normal pattern.(p. 371) とあるところが、竹中訳では、「天皇の不在などで、政治の空白期間が続き、もっとも力の強い者が世を治めるのが当たり前のことになっていた」とされている (308 ページ)。ここに言う「政治の空白期間」が天皇制についてのことだとされている。しかし、With some interruptions and interregnums は this rule by the strongest についてのことを言っていると読むべきではないであろうか。まず、前置詞の with はとって使用法の多い単語であり、その中に、「付帯状況を示す」というものがある。たとえば、基本的な英文法の参考書 (『徹底例解ロイヤル英文法』(旺文社刊)にもこの用法が挙げられており、例として、

The little girl called out to her mother, with tears running down her cheeks.

He sat in the chair with his legs crossed.

Don't talk with your mouth full. (以上は 468 ページ) とか、さらに

Listen to me with your book closed.

The bear stood there with his tongue hanging out. (熊は舌をだらりとだしてそこに立っていた)(以上、626 ページ)

が挙げられている。この用法では、多くの場合、with という前置詞の目的語に補語がついていることも理解できよう。

したがって、ここでは、With some interruptions and interregnums は後に続いている「強者による支配」が「政治の空白期間」をもつという状態を言っていると解釈したほうが自然ではなからうか。つまり、鎌倉幕府から徳川幕府まで切れ目なく強者による支配が続いたのではなく、1603年に家康が征夷大將軍に任じられるまでには群雄割拠の時代が長らく続いたことを言っているのではあるまいか。

ランダスの著書に戻ろう。これはフランス中世でも同じだったとして、メロリング朝からカロリング朝に移ったこと、その後はさらにカペー朝に移っていったことを挙げる。ただ、日本の場合は、前の王朝を廃位させるとか抹殺するというのではなくて、immure (= 閉じ込める、幽閉する) したのである。天皇とその家族、宮廷の人たちは京都にあった宮廷あるいは寺院に閉じ込められ、徳川将軍が見張った。そこでは、帝は詩をつくり、象徴的な儀式 (最初の田植えなど) を行い、一定の娯楽を楽しませられ、そのような神聖なる奉仕をさせられたのである。

しかし天皇が存在したから、正統性をもつ支配者——この場合、支配者の上の支配者ということになるか——がいたことになるが、徳川将軍家の敵にしてみれば、他に名誉ある支配者を見上げることが可能であった。個人的忠実より価値あるものはない社会では、反

徳川のエリートたちは、より高い天皇を、不忠にならずに将軍以上の権威（つまり天皇）を敬うことができたのである。

つまり、国家統一の象徴はすでにそこにいることになった。国の理想・プライドとともに、すでに決まってそこにあった。これが多くの混乱から日本を救った。国内戦争のような革命は、秩序と効能ある統治にとっては惨事になり得る。明治維新には反対者はいたし、反対者は時として暴力的でもあった。旧体制の最後・新体制の初めは、暗殺の血に染められた。それでも日本における移行は、フランスやロシアでの体制移行よりはるかにスムーズであった。これには二つの理由があった。

- ① 新体制は道義的により高い地盤をもっていたこと。
- ② 離反した側、屈辱を受けた側でさえ、国外の敵に武器を与えたり、なにかのチャンスを与えることを恐れたこと。

日本の外には、外国の帝国主義者がいつでも上からつかみかかろうとうようよしていた。そして国内の分裂は国外からの干渉・介入を招いたであろう。他国の帝国主義の例を考えてみられたい。地方の喧嘩や陰謀が、実際にヨーロッパの大国のインドへの介入を招いたではないか。

徳川将軍による支配は19世紀半ば以前にすでに破綻しつつあった。かつての、藩の場所や位を決めたルールはすでに軽んじられていた。窮した侍たちは商人の女性跡継ぎと結婚した。豊かな農民は、地方の有力者になり、田舎の上流階層になっていた。服従というものとは溶解しつつあった。裕福な藩（本州の西方と九州の南の地方にあった）では、独自の外交政策をとりつつあった。将軍より自分たちの方が、これら言語道断にして無礼な野蛮人には、きちっと対処できると考えていたのだ。海外からの技術者や顧問を雇うと、武器が外から入り、武器庫ができ、造船所までできていった。なかには、農民に徴兵の義務を課したところさえでてきた。幕府もこれを見習うことになった。もともと百姓が武器を持つことは禁止され、侍が刀をもって威張り散らしていたところでは、これは、公共の秩序・社会の優先順位の大きな違反であった。このことのもたらす結末は計り知れないものがあつた。しかし、これ以外に戦争に備えて武装する方法はあつたのか？侍たちは鉄砲で戦うことをひどく嫌がった。これは、品位を傷つけるものであり、不名誉なことなのであつた。

この時点で、短期しか将軍職に就かなかった者、指導力を発揮できなかった将軍は、相続

方法についていろんな不和を醸成することになった。こうなると、さらなる陰謀が生まれ、京都に対しても将軍というものを転覆させてやろうかと思わせることになった。そして、再三にわたって、外部からの圧力は将軍を困らせることになった。それまで外国人を受け入れてこなかった社会では、西洋人がいるだけで問題を醸し出した。日本の bully-boys(ガキ大将たち?) はこれら厚かましい外国人になんども挑戦し、攻撃をしかけた。だれがボスなのかを見せつけてやった方がいいと思っていた者たちである。そしてボスは誰だったのか? 将軍ではなかった。西洋からは報復、賠償を要求してきたのに対して、日本側は時間かせぎをし、優柔不断な態度は、外国人から見ても日本の愛国主義者たちから見ても、名誉を失うだけであった。

しかし、それではいったい何をしたらよかったのであろうか? 外の勢力は自分たちの方が強いことをよく知っていたから、暴力にひるむことはなかった。1862年(文久2年)9月、一群の侍たちが意図的にイギリスの商人たち数人と白人女性ひとりを襲った。これは生麦事件である。そして、幕府にしろ薩摩藩にしろ、賠償しようとはしなかったし、できなかった。1863年(文久4年、元治1年)8月になるとイギリスは、鹿児島 の城下町を砲撃しようとして艦隊を派遣してきた。この教訓は効いた。現実には直面した薩摩藩は、イギリスと貿易をし、外交関係をもつことを提案した。これはもちろん、将軍だけが外交関係をもてるというそれまでの政策を真っ向から嘲弄するものであった。

筆者はこの事件について、薩摩久光の行列が「下に、下に」と声をかけて行進していたが、この意味をしらなかったイギリス人は馬から降りてひざまずくという行為をとらなかったことから、薩摩藩士がこれをとがめて、彼らに襲いかかった…と理解している。ランダスはここで、a team of Satsuma warriors deliberately attacked some English merchants and a European woman (p. 373) としているのみである。イギリス側が日本の様式をもっとよく知っているべきだったのか、あるいは、日本側が外国人が日本の風習などを熟知していないことをもっと寛大に、思いやるべきだったのか(竹中訳ではこの生麦事件に関する部分の訳は省かれている)。

あるいはイギリス人たちは「下に、下に」という日本語を理解しなかったかもしれない。通訳者はいなかったのであろうか。通訳という仕事は、今では異文化間コミュニケーションを図るものとされている。

ランダスはほんの少し後に、The codes were different. としている。ここでもそれが言えるのみならず、ここの方が具体的にそれを示せたのではあるまいか。ここで殺された Charles Richardson も、日本語が分からなかった？ では、それまではどのような形で日本人と話し合いをしたのであろうか？ このころには、長崎のオランダ通事のなかからも英語を学ぶ者がとくに現れていた。彼らのなかから誰かを通訳者として雇う——ということをしていなかったのではあろうか？

同じことが長州藩にも起きた。1863年（文久3年）6月25日を攘夷決行の日と宮廷が決めていたのに、長州の性急な愛国者たちは、下関海峡を通過するアメリカの船に発砲したのである。一年間ほど交渉を続けたが、これが行き詰まると、1864年9月にイギリス、フランス、アメリカ、オランダの4国の艦隊17隻が305門もの砲台をもって下関港に進入してきて、そこのすべての要塞を破壊した。長州は降参し、薩摩は、西側と直接的かつ友好的な関係を求めた。そして、長州と薩摩は伝統的に関係は緊張したものであったが、今やこの両藩が手をとって幕府を亡き者にしようとする事になったのである。

幕府も自分たちの弱さと不能ゆえに、信用を失ってしまった。いったんアメリカ合衆国のタウンゼント・ハリスとの条約に署名し（1854年＝嘉永7年、安政1年）、ヨーロッパの主要国と条約を結ぶ（1858年＝安政5年）と、幕府は名誉も正統性も失ってしまった。同じく「名誉」といっても、日本の名誉は西洋の名誉ではなかった (Meanwhile Japanese honor was not Western honor.)。The codes（ある階級・同業者などの規約、慣例；社会のおきて）were different. つまり、日本と西洋とは同じではない。慣例・しきたりが異なっている。よって、日本の名誉と西洋の名誉はことになっていた。ある男のことは他の男の逃げ口上なのであった (One man's word was the other's prevarication.)。幕府はあっちへ行ったりこっちへ行ったりすればよかった (Twist and turn, the *Bakufu* might.)。部下に交渉させて、その後、より高位の者の確認が必要になるようなものである (p. 373)。一旦署名した後、この合意は天皇の裁可を受けていないと議論を蒸し返すようなものである。つまり、約束しつつ、ちょっと待ってくれ、と言うようなものである。イエスと口では言うが、実はノーのことだ、ということになる。こんなことより紛争をややこしくするものはない。将軍は不可抗力に屈したほうがよかったであろうし、それを明言したほうがよかった——「あなた方西洋の方々は鉄砲を持っている。それでいい

ですよ、ただ、我々もそのうちに同じものを持ちますから…」と。

ここでランダスは太平洋戦争のきっかけとなった、日本による真珠湾攻撃について、括弧つきで、ほんの10行だけで触れる (p. 374)。——「ここでは、日本の真珠湾攻撃についての誤解と比較してみたらよい。アメリカ側にとっては、live in infamy=の日であり、日本にとっては、不幸なタイミングの上でのエラーであった」と始めて、日本はこの攻撃の半時間でも前に、いくら直前であろうと曖昧な表現であろうと、アメリカに「交渉を打ち切る」という知らせをアメリカ側に送ることになっていたが、実際には、攻撃の後にこの知らせを渡すことになったことだけが問題だと今日でもしているが、実際には長期にわたって攻撃を準備した奇襲であったとする。

筆者にとっても、この奇襲の件はとっても関心のある問題であり、これまでも、たとえば、東京とワシントンの日本大使館との遣り取りが暗号を用いて行われたいたが、アメリカ側はこの暗号を解読していたので、真珠湾が攻撃されるのを知っていたが、わざと攻撃させたのだ、そして日本が卑怯なことをしたという印象をアメリカ人に与えようとした…という説があったし、逆に、暗号を前もって解読していたなどということはありませんという説もある。

日本の真珠湾奇襲については、筆者にとっても興味あるいくつかの説が唱えられている。ひとつは、東京の外務省とワシントンの日本大使館とのやりとりが暗号文でなされていたが、アメリカはこの暗号を解読してしていた、という説である。だから、時のルーズヴェルト大統領は、日本とアメリカが交渉を続けているのに、日本が真珠湾攻撃の準備をしていて、アメリカ軍を攻撃しようとしていることを知っていた。しかし、大統領はこれを真珠湾の司令官 Kimmel 大佐に知らせなかった。なぜか？ 当時、ヨーロッパではすでにヒトラーとイギリス・ソ連の間で戦争が始まっていて、大統領は密かにイギリスを援助していたが、アメリカ国民はヨーロッパの戦争に巻き込まれたくないという雰囲気が高く、表立ってヒトラーに宣戦布告をすることができないでいた。だから、わざと「日本は卑怯だ」と思わせることによって、アメリカの世論を変え、ヒトラーとの闘いを表明したかったのである。しかし、真珠湾攻撃の被害は思ったよりひどかったので、これを大統領があらかじめ知っていたとはみとめられなくなってしまった——そして、逆

に日本はこれ以来、live in infamy（不名誉なる国）と断じた、という説である。

しかし、この問題は、ここで論じるにはあまりにも大きな問題なので、できれば他日を期したい。ただ一点だけ、Craig Shirley, 2011, *December 1942: 31 Days that Changed America and Saved the World* (Nashville, Dallas, Mexico City, Rio de Janeiro, Thomas Nelson, 2011) の説に触れておきたい。この本には、以下のような極めて具体的な叙述があるからである。ちなみに、本書は筆者が2013～2014年の滞米中に、大きな drug store でそのタイトルを見て、購入していたものである。

「美しいアメリカの女スパイでヨーロッパに住んでいた Amy Thorpe Pack が、British Security Coordination によって recruit された。その赤毛、きらめく緑の目、そして、女性のもつ wiles（手管、たぶらかし、狡猾さ）を利用して、ドイツの暗号解読技術で “Enigma” と名づけられていたものを盗むためであった。これがやがて、1941年に行動を起こすアメリカの軍人によって “Magic” とニックネームで呼ばれることになる仕掛けとなり、東京とワシントンの日本大使館との間の秘密のメッセージを解読することになった。この技術は、“the greatest secret and most spectacular intelligence achievement of the war.”（戦時の最大の秘密、かつ、最も壮観な諜報上の功績）と呼ばれた（この部分は、David Brinkley, *Washington Goes to War*, New York: Alfred A. Knopf, 1988, p. 43 よりの引用）。

アメリカ人はこの発見のおかげで自分たちは安全だと見た。つまり、日本の外交官たちが枢軸国によってなにかの軍事行動をとることにしたならば、その瞬間に自分たちもこれを知ることになるのが当然だとしたからである。戦争の警告が Kimmel と Short に送られたが、それ以上の詳しい情報は付随しなかった。ただ、フィリッピンなどの場所には触れられていたが、ハワイはここでは触れられなかった。* 地方紙 the *Hilo Tribune Herald* の1941年11月30日版は、大声で叫んでいた——“JAPAN MAY STRIKE OVER WEEKEND.” ** と（Hilo はハワイ州ハワイ島東海岸の都市で、島の観光・水産・農業の中心地で、日本人も多いと言われる）。少しばかり時期尚早の警告だったので、盗まれた技術に対する熱狂も冷めた。そして、分析者たちは、subtle and enigmatic（微妙で得体のしれない）東洋人の心を解釈する自分たちの能力についてますます自信をもつように

なっていた。

* Walter Trojan, "Blame 2 for Pearl Harbor!" *Chicago Tribune*, January 25, 1942, 1.

** *Hilo Tribune Herald*, "Japan May Strike Over The Weekend," November 30, 1941, 1.

ともに、Shirley, *op. cit.*, p. 632 より。

ここでランダスは真珠湾攻撃について、括弧つきで触れる——（ここでは、日本の真珠湾攻撃についてへの誤解と比較してみたらよい。アメリカ側にとっては、live in infamy・・・）

ただしここに、竹中訳に「はてな？」と思ってしまう点がある。原文は、Compare here the misunderstanding over Japan's attack on Pearl Harbor: 'for the Americans, a day that would "live in infamy", for the Japanese, an unfortunate error in timing...'となっている。これを、竹中訳が「アメリカにとってはあの日は、『生きて汚辱をさらした』日で、日本にとってはなんとも不運な過ちだった」(311 ページ)としている。奇襲を受けたアメリカが<生きて汚辱をさらした>日なのであろうか。日本にとっては、どのような不運だったのであろうか。

たしかに、この英語だけを見ていけば、このような訳にならないことはない。しかし、まず、筆者がしてきた通訳という仕事では、英語とフランス語の間の通訳でも——この両インド＝ヨーロッパ語族に入る言語間でも——、1語1語の対応<word-for-word correspondence>はそもそも不可能であるし、それをしても訳の分からない訳になってしまうので、しないとされる。ましてや日本語はウラル＝アルタイ語族の言語で、主語も必要ないし、名詞の単複もいつも示す必要はない言語である。日本語で「野党」と言った場合、これを英語で言うと、the opposition party となるか、あるいは the opposition parties となるか。これは、いわゆる<背景の知識 (background knowledge)>をもたなければ決定できないし、その時によって違う。

そして、通訳の過程は、まず起点言語 (source language) を正確に理解してその意味 (sense) を把握する、次に、ここで使われた個々の単語・表現は意図的に忘れて、意味だけを保持する、そしてその意味を spontaneous に目標言語 (target language) で表現するものとされるし、これはたいていの通訳者が受け入れている<理論>である (拙著『通訳とはなにか』、とくにその 18-38 ページ) を参照されたい。

ランダスの原文に戻ると、英語だけを見ている限りでは、竹中訳のように訳すこともできよう。しかし、それでは背景の知識がまったく機能していない。そして、ここに必要な背景の知識とは？ アメリカ側が真珠湾の奇襲をうけたことを<生涯、忘れられない汚辱だ>と考えたのかどうか…ということであろう。

しかし、まず、真珠湾攻撃を実際にアメリカがどう捉えたかから考えると、攻撃を受けたことをアメリカはこのようには受け止めていない。アメリカはまだ日本と交渉中だったと思っており、この奇襲は「日本が卑劣な攻撃をしたのだ」とした。だから、それまではヨーロッパのヒトラー対ソ連・フランス・イギリスとの戦争には参加していない (ルーズヴェルトはイギリスに武器以外の点ですでにいろいろと応援をしていたが…)。アメリカ国民はヨーロッパの戦いからの中立を採っていた。しかし、この攻撃によってその態度が変わり、たとえば、翌日から、Ford 社の assembly lines からは、それまでは完成した自動車が出てきていたものが、戦闘機が出てくるようになったとされるくらいである。つまり、アメリカはそれまではヨーロッパの戦争には中立を決め込んでいたのだが、大統領のルーズヴェルトはこれに反対であった。なんとかならないものか…と思案していた？

ここで問題になるのが、アメリカによる日本側の暗号解読である。一説では、a native Americanによって解読されていたとされる。だから、ルーズヴェルトはこの奇襲があることを知っていたことになる。では、なぜ彼はこの情報をハワイの太平洋艦隊に知らせて、準備をするように言わなかったか？

あまりにもアメリカ側の被害が大きかったため、「これを知っていたが、太平洋艦隊に知らせなかった」とは言えなくなってしまったのだと筆者はどこかで読んだことがある。たとえば『ブリタニカ国際大百科事典』（電子辞書版）によれば、「…翌日（アメリカ時間では1941年12月8日）、ルーズヴェルト大統領は議会で「屈辱の日としてわすれられることがない12月7日と宣戦演説を行った」とあるが、これも事実ではないと考えられる。

ランダスの言うところに戻ろう。The pretensions of the outsiders were the heart of the matter. ランダスがこのように言うのは、具体的にはどんな意味なのであろうか。とにかく彼はここで＜含蓄のある＞「尊王攘夷」というスローガンについて考えてみたいと続ける。天皇を尊び、蛮人を排斥せよ、というのだ。体制の変革を求めたのは南の端の藩と西の力（薩摩藩と長州藩）であった。一時期は相互に敵対していたのだが、今や反幕府で結びついた。この2藩は、勝利し、かつ敗退した (They won; and they lost. P. 374)。これも、革命・復古のもうひとつのパラドックスである。指導者たちはこれで昔に戻ると思っていたのが、明日（＝近代化の波に）とらわれたことに気が付いたのである。これしか西洋の野蛮人たちに勝つ道はなかったからだ。

ここで、真の意味の革命家たちが引き継ぐことになる。つまり蘭学者、技術者、進取の気性に富んだ官僚たちである。1868年は、いくつかの港の開港で貿易が始まることで開けた。4月6日には新天皇が5か条の御誓文を出し、新たな民主的な市民国家を作ること誓った（これは、「言うは易し、行いは難し」となり、これは日本国民への約束というより、外部でこれを見ている者への外交辞令だったのかもしれないというのがランダスの見方である）。真に重要だったのは中央政府の変革、封建制度の廃止、廃藩置県、県知事の中央政府による任命、かつての武士への俸禄に代わって中央政府に税金を治めるようになったことである。ここでも薩長両州が模範を示した。1869年3月に、この2藩の大名たちは自分たちの土地を天皇に捧げた。ということは、国に差し出したということだ。他の大名たちはこれにならった。なぜか。これが正しいこと、忠義な者のすることだったからである（これを見ると、再びフランスのことを思い出す——1789年8月4日という運命の夜、フランスの貴族たちは封建制度下の賦課金を自発的に返納した）。日本の農民たちは大名に物納するのを止めて、中央政府に税を払うようになったのである。

日本は近代化を行うにあたって、例によって強烈かつ組織的に行った。準備万端、整っていた——として、明治時代についてより詳しく述べる。効力のある政府、高い識字率、「正しい」家族主義、労働の倫理と自己規律、自らが日本人であるという自覚、そして、もともとあった優秀性——これだけのものが整っていたとするのである。

これがものの本質であった、とランデスは始める。日本人は自分たちの優秀性を知っていた。これをまさに知っていたので、他の人たちの優秀性を認めることもできた。徳川時代に倣って、外国の専門家を雇い、日本人を海外に派遣して、ヨーロッパとアメリカの実態を目で見させ、国に帰ってこれを語らせた。この中身こそが選択の基盤になった。長所を注意深くかつ柔軟に比較するという知性が選んだのだ。こうして、初めはフランスの軍隊をモデルとしたが、1870～71年にフランスがロシアに負けると、ドイツのモデルの方が学ぶところが多いとした。法典・法の実施についても、同じようにドイツをモデルとするようになった。

学ぶ機会はいっさい無駄にはしなかった——これが日本の特徴だったとランデスはする。1871年（明治4年）10月には岩倉具視を団長とし、大久保利通や伊藤博文の加わった代表団がアメリカおよびヨーロッパを訪れ、1850年代に結ばされた不平等条約の廃止を訴えた。とくに関税自主権を獲得して、自分たちの幼稚産業 (infant industries) をよりうまく育てられるようにしようとした。しかし、ここでは越えがたい壁に突き当たった。西側の国々は、やっと手に入れた特権を易々とは手放そうとはしなかったのである。〈こんなことに負けてはならない〉——代表団は自分たちの自尊心を抑えて、各地を訪れる。そして、工場・鍛冶場を訪問し、造船所・兵器工場・鉄道・運河などを見て回り、やっと1873年（明治6年）9月に帰国した。ほぼ2年後、戦利品と学んだ改革への「火のような情熱」をもって帰ったのである。

日本の指導者たちが自ら直接に体験したことは、決定的な違いをもたらしたとランデスは続ける。イギリスで汽車に乗り、工業地帯の景色を見て瞑想し、大久保利通はしょげてこんなことを言っていた——離日前には自分のすべきことは終わったと思っていた、と。天皇制に戻した、封建制にとって変わって中央政府ができた。しかし今や彼は理解した——ほんとうに大きな仕事はまさにこれからだ、と。日本は「世界のより進んだ強国とは比較もできない」と。とりわけイギリスは自己発展の教訓を与えた。この国

は、かつては日本と同じように、小さな島国であった。その国が自己発展の政策をとった。その商船団が世界を威圧するようになるまで発展させたのは航海法であった（イギリスが、中世から近世にかけて、海運や貿易の振興を図る目的で制定した法で、1651年《慶安4年》の法は、植民地との貿易をイングランドまたはその植民地の船に限定し、ヨーロッパ製品の輸入をイングランドまたは輸出国の船に限定した——この法は1849年《嘉永2年》に廃止された）。イギリスが産業上で指導的な地位を獲得するまでは、保護主義 (protection) を捨てて自由放任主義 (laissez-faire) をとることはしなかった。この分析はまんざらでもなかった、アダム・スミスも反対はしなかっただろうとランダスは大久保を褒める。

確かに日本は、17世紀の英国が享受した関税や通商上の自治権は、（それを日本が）もとうと思ったとしても無理であったろう。*もっと苦しめられたのは、ヨーロッパが不平等条約の再交渉を拒絶したことであった。ただここでは、ランダスは「ドイツの前例が意味をもった」と西洋との比較を忘れない。ドイツは日本と同様、やっとそのころになって国内の統一ができた。日本と同じようにドイツも、経済的な劣位から出発していたにもかかわらず、どこまで来ていたのかを見てみよう…。大久保利通は、自分の会ったドイツ人に好印象を受けた。みんな儉約家で勤勉、控えめであった——まるで日本の庶民のようだと思ってしまう。しかも、ドイツの指導者たちはみな、現実主義者で実際家であった。「国家の実力を築く」ことに集中なされよ、と彼らは言った。大久保は日本に帰ると、このようなドイツの進路を官僚たちに指示した。

*の部分は、原文では To be sure, Japan would not have the tariff and commercial autonomy that seventeenth-century England had enjoyed.(p. 375) となっている。これが竹中訳では単に「たしかに、日本には17世紀にイギリスが欲しいままにした関税や商業自治権はなかった」(314ページ) となっている。この点について少しだけ考えてみたい。

ランダスの原文は、たとえば、If I had voted for him, he would not have resigned. (もしわたくしが彼に賛成投票していたら、彼は辞職しなかっただろう) という文と同じ仮定法過去完了の文で、ランダスの文では、この If …の部分 (=条件節) が省略されているのである。もちろん、… that seventeenth-century England had enjoyed は that という関係代名詞に導かれた修飾節で、「17世紀の英国が享受した(ところの)関税や通商上の自治権」とつながる。省略されている条件文は、たとえば、…even if Japan had wanted to have the tariff and commercial autonomy (=もし日本が関税や通商上の自治権をもとうと望んだとしても) である。これが省略されているのである。原文では「たとえもし日本が17世紀に関税自主権・通商上の自主権をもとうとしたとしても、そうはいかなかっただろう」という含意が入っていると考えられるが、竹中訳では前半が落ちているので、「でも、17世紀に日本はそんなものを望んだわけでもないのに…」という反論がランダスに対して出るようになってしまおう。ランダスはそんなこ

とは言っていない。17世紀と言えば、1600年に関ヶ原の戦いがある、石田三成の率いる西軍が徳川家康の率いる東軍に負けた決定的な戦いがあったし、江戸幕府は1639年から1853年（ペリーが下田に来た年）まで、鎖国政策をとっていて、オランダ・中国・朝鮮を除く外国との通行を禁止していた。この時代に日本が関税自主権や他の外国貿易上の主権を大きな問題としていたとか、ここで、「もし日本が全体としてこうした自主権を望んだとしても…」というような条件節が隠されているとは考えられない。原文は仮定法過去完了で、過去の事実の反対のことについて論じるものであって、その条件節が省略されているので、… if … という表現が表には出てきていないだけであり、書いた人ランデスはこれを過去の事実の反対として考えていたのに…。

さて、このような西洋の認識をもって帰国した大久保利通が新政府の官僚たちに指示したドイツの進路の内容をランデスは具体的に以下のように述べていく。まずはふつうの政府の仕事で、郵便事業、新しい標準時間の設定、公的教育（初めは男子で始まるが、すぐに女子にも及ぶ——そして、初めは4年間の義務教育で始まるが、1907年（明治40年）にはこれを6年に延長したこと、さらに「日本語の書き方は難しかったので、識字率を上げるためだけでも3～4年はかかった」と、脚注につけている（日清戦争の後、就学率が急上昇し、1907年には97パーセントに達したことが『Japan Chronik 日本全史』、995ページには記されている）。とくに新標準時と義務教育の設定で、新社会を定義づけたとランデスは強調する。義務教育で知識は普及したのは当然だが、その他に、しつけ、服従、時間厳守、天皇崇拝を挙げる。これで、偏狭な地方根性を乗り越えて、〈われわれ〉という national identity が育った。全国のカレンダーも同一化され、身分が違って、天皇崇拝を中心とした同じカレンダーを使うようになった。どの学校でも天皇の写真（御真影）を飾り、国民の祝日には全国で同時に、同じ天皇像の前で同一の儀式が行われた——と。

ランデスは、Every school had its picture of the emperor, and on every national holiday, the same ritual was performed in front of this icon throughout the country *at the same time*. (p. 376) と、*at the same time* をイタリック体になっている。筆者は、これを初めに読んだ時にはこのイタリック体を気にならなかった。しかしいったんこれに気が付くと、いろんなことが思い出される。まず、日本には標準時は一つしかない（沖縄から知床半島まで同じ時間というのは便利ではあり、知床で日の出を見て、2時間くらいたって沖縄で同じ日の出を見ることになっているのだろうが、航空機の時刻表などは、複雑にならずに済む。これに対して、ランデスの故国アメリカでは、本土だけでも4つの標準時があり、アラスカ州だけでも3つの標準時がある。

だから、サンフランシスコからニューヨークに飛ぶ時には、サンフランシスコを発つのがたとえば朝の10時だとしても、この時にはニューヨークではすでに午後の2時になっている。この間を一直線に non-stop で飛んで、たとえば3時間かかるとすると、ニューヨーク到着は夕方5時である。逆にニューヨークから東に飛べば、10時に出発して、3時間も飛んで、サンフランシスコに到着するのはなんと同じ時間（10時）に到着する。

太平洋の真ん中にある日付変更線を越えて飛ぶ場合を考えると、たとえば、成田空港を午前10:45朝に出て、日付変更線を越えてアメリカ大陸に飛び、テキサス州のダラス（ケネディ大統領が暗殺されたところである）まで飛んで、ここに着くのは現地時間で朝の8:25である。成田を出た時間より2時間20分ほど前にダラスに着いてしまうのである。逆にダラスを出て成田に戻るときには、ある日の朝8:05にダラスを出発して、成田に着くのは翌日の16:55、ほぼ午後5時である。ダラスに行く時には1日、得したことになり、逆に日本に戻る時にはたいへんな時間がかかる…ことになる。成田からサンフランシスコまで飛ぶと、成田を出たのとほぼ同じ時間にサンフランシスコに着陸することになる。

もちろんこれは、要するに〈時差〉の問題で、日本国内ではこの〈時差の問題がない〉ということになる。アメリカでは国内でこの問題は初めからある。さらに、日付変更線の問題となると、真珠湾攻撃についても、こんな問題が起こり得る——真珠湾の攻撃が行われたのは、12月7日であったが、これはアメリカ時間での話である。日本時間では、12月8日であった。

終戦直後に日本にやってきたアメリカの新聞記者が日本人に、「12月7日に日米間で起きた大きな事件はなんだったか、ご存知ですか？」と訊いた。訊かれた日本人は、「12月7日？ はて…」と言って、答えられなかった。このアメリカの記者は、「日本人は歴史をすぐに忘れてしまう…」という記事を書いたとのことであるが…。

ランダスはここで、この全国統一を完成させた主体として陸軍と海軍を出す。そして、制服と服従という同一物の下に、一律に兵役が義務化されたことが、階級・出身地の差をなくしてしまったと論じ進む。そしてそれが、ナショナリズムの誇りを植え付け、これで、戦う権利が一般化した。さむらいが武器をもつ独占権が終わったのだ。ここでカッコつきでランダスは言う。「かつての平民すべてがこれに拍手をしたわけではなかった。戦争と

暴力はいつもエリートたちが独占していたし、その報酬として手当をもらっていた。歳をとってこのような教育を受けられなかった者は、〈なんでこんなバカなことが行われるのだ〉と言ったが、どのみち、戦いはしなかった」と。

ランダスはここまで日本自体のことを論じているが、このあたりから、アジアのなかの日本が視野に入ってくる。そして、それが、日本がヨーロッパを知ったことの当然の成り行きであるかのごとく述べていく。——日本の身分の高かった者も、市民の軍隊というものを権力に必須のものだと見たし、自由であること、ヨーロッパ人に反論すること、ヨーロッパ人が人をこき使っていたようにすることも、極めて重要な目的であった。しかし、かつての一般人がみんなこの変化に拍手喝采したわけではなかったと、カッコをつけて論じ続ける。——1871年（明治4年）9月、新しい日本は中国と新しい条約の交渉をした。この条約は、西洋諸国に認めた治外法権や貿易上の特権を日本に認めはしなかったが、同等の2国間の条約として調印された。これはまさに momentous な（ゆゆしき）出来事の初めてのものであった（不平等条約などがこの後にやってくる）。

これに続いたのは1874年（明治7年）の台湾出兵であった。これで琉球が日本の主権下にあることが確認され、後に台湾自体を日本領とするための基盤が敷かれた。その後、1876年（明治9年）、朝鮮への海軍の出兵で、中国は朝鮮の独立を認めた。これはいわば poisoned gift（毒入りの贈り物、毒入りまんじゅう）であって、これによってやがて日本が侵略するのに対して朝鮮がその保護膜を失ったようなもので、同時に日本はこれで治外法権を確保し、通商上の特権を得た。これがさらに日本の食欲をそそることになり、さらなる利得を求める方向に押し進む。エネルギーと力をもって炸裂した新生日本は、その敵をそこに現れた瞬間に誰だか見極めた。偉大なる中国は傷ついて倒れていた。かつて仰々しく振舞ったことで攻撃を招いてしまった。

それより前の1873年（明治6年）11月に帝国内閣は和平派とタカ派に分かれていた。和平派は国内の近代化と建設に集中したかった。タカ派は朝鮮との戦争を…と叫んだ。寡頭政治家のうち5人が辞職した。そのうちの一人は、薩摩出身で將軍家を倒した方の一人、西郷隆盛であった。しかし話はここで終わらない。かつての勇士たちは個人的な不満

を国レベルに突き出して、1876年（明治9年）に日中朝修好条規が結ばれたのに反対の声を挙げた。これがいかに日本に有利なものであったとしても、タカ派は朝鮮に居座ることを主張したのである。これこそ、大陸を征服すると言うかつての夢を実現するものであった。

この条規が結ばれたことで失望すると、タカ派は侍階級に反対するふたつの戦略を採った。第一に、かつてもらっていた俸給が年金になっていたことについて、その総額を一挙に受けるのが可能になることを要求した。侍たちは年俸の代わりに、国債をもらっていて、紙幣の価値は通貨政策と円の価値によって決まった。インフレで侍たちが生活のために働くようになるのに長くはかからなかった。中にはうまくやった者もいたが、貧困に沈んだ者もいて、恨みをいだいていった。その他、それまでのプライドを捨てて、それまでの地位を高給の仕事や結婚に転換していった者もいた。これが、どこでも、身分を失った者のすることだった。貴族の青い血、その横顔、気取った物腰を金（かね）に変えていったのである。

第2にしたことは、象徴の意味ではさらに苦痛を伴うものであった。かつての侍たちは2本の刀を振りかざして歩くことを禁じられたのである。刀こそ、平民が命からがら逃げていたものである。ほとんどの平民は、刀がなくても、それまでのくせで震えていたが、でも今や、農民でさえ銃をもっているかもしれないという事態になった。政治家や政治屋は競争して西洋化につとめた。公式のヨーロッパ風衣装を着て歩くようになった。パリで結婚式に出るほうが、東京で日日の仕事に出るよりよほどしっくりしていた。おかしな帽子をかぶり、ウエストあたりまでの短めのジャケットを着た。雨が降っても晴れても、洋風のこうもり傘を振り回していた。馬車に乗り、テーブルの周りに、椅子に腰かけ、新たに建てられた石の家に集まった。この建物は、伝統の木と紙の家をしっかりとつくるような雰囲気があった。

ランダスはここで、脚注をつけ、以下のようにつけ加える——上のような象徴は、それまで特異なものに徳があるとしてきたものである。薩摩藩の島津久光が1875年（明治8年）に天皇に嘆願して、洋風の衣服を着ることを禁じてもらいたいなどと言った。この願いは拒絶された。久光は東京を離れて、すねて、陰謀をたくらんだ、と。

侍たちの不満は政治的暗殺に行きついた、とランダスは論じ進む。もっとも壮観だった

のは1878年（明治11年）5月の参議兼内務卿で、新生日本の生みの親、大久保利通の暗殺であった。内務卿とは、ただ警察・公共の安寧を保つことが任務だったのではなく、経済の発展、産業促進もその任務であった。彼はその時、自宅から東京の赤坂にある仮御所に、外国製の馬車に乗って、向かっていた。6人の殺害者のうち5人はかつての侍であった。彼らはすぐに自首したが、その斬奸状（ざんかんじょう）によれば、戦士たちが物不足で苦しんでいるときに、経済的な些細な出費は浪費であるとした。しかし実はシンボルにも大きな意味があった。何年も後のことになるが、ベルギーの大使夫人（当時、大久保のかつての家に住んでいた）がこんなことをその日記に書いていた——「大久保さんが不人気だった理由のひとつ（そして、政治的暗殺のひとつの理由とも言えること）は、このとてもヨーロッパ風の家屋の建築だったと聞かされた」と。

こうした暗殺はほとんど何も変えなかった。反乱自体も同じであった。古きものが新しきものに会った。そして、古きものが負けた、とランダスは明治の日本を見る。

この間に、国家と社会は、ビジネスというビジネスにせさせと励んだ。機械を使って物をつくる方法、機械なしでもっと多くのことをする方法、物を動かす方法、そして、海外の物とどうしたら競争できるか…ということであった。これは簡単なことではなかった。ヨーロッパ諸国が1世紀もかけてやってきたことである。日本はあわてていた。

まず、明治以前によく知られていた産業の一部をさらに発達させようとした。つまり、絹と綿製品の製造である。しかし同時に、外国に真似のできない食品についてもその加工法を改めていった。酒、みそ、醤油などである。1877年から1900年（明治20年から明治33年）が第1次産業革命の時代であった。経済の成長の40パーセントを食品が、繊維が35パーセントを占めていた。つまり日本人は、初めから重工業のほんの一部をつかむより、比較優位のある産業に集中したのである。その多くが小規模なもので、綿織り物の織機で、紡錘機は2000台程度（西ヨーロッパでは数万台が普通であった）、水車もヨーロッパの技術と比べると数世代、遅れていた。ここでランダスは水車の日本独特の制約に脚注で触れる。日本では水の利用にヨーロッパとは違う制約があった。とくに、河岸の農民が灌漑のための水について、犯せない権利をもっていた。よって、日本では川の真ん中に船を浮かべて固定し、左右を流れる川の水が水車を回したのである。これは結局、水の上に浮かぶ工場なのであって、実に独創的なものなのであった——とする。ランダスはこ

れを、Minami Ryosin, 1987, *Power Revolution in the Industrialization of Japan* から引いている。さらに当時の日本の炭鉱について、曲がりくねった鉱脈や手で引くバケツをみると、悪名高いイギリスの初期の炭鉱がまるで避暑地の遊歩道のように見える——とする。

経済学者たちはこうした後発国のモデルを説明するのに、カッコ内で「後発は偉大で、最新のものだ」とからかいつつ、……資本の不足を言う、とする。人的資源もわずか、投資銀行なんてない…。それでも、商人の中には巨大な富を蓄積した者もいて、国がこれを支援し、工場に補助金を出した。しかし工場がどうやら赤字を逃れるには長い時間がかかり、これにはお金より人間が必要だった。想像力をもった人、先駆けて事業を行える人のこと、つまり規模の経済を承知していて、生産方法や機械だけでなく、編成や組織化のできる者が必要だった。いまではソフトウェアと呼んでいるもののことだ。これがあれば資本は後についてきて、大きくなる。

初期の手探り状態の実験には、多くの失敗があったとランダスは厳しく見る。1880年代初期（1880年は明治13年）には、政府が官営の工場を民間人に売り払った。この決定は実は国の名誉にもなることであった。官僚というのはめったに過ちを認めないし、権力を手放すものではない。国営の国の加工工場は低利で譲られ——友人やコネのある者に対してであったので、これが最高の取り決めとは言えなかったが、実効的には営業の補助になり、あるいは新たにビジネスを始めさせることになった——。同じころ、綿の商人たちは、つむぎ糸から機械紡績に転換していった。

ランダスはここで脚注を入れ、日本ではつむぎ糸が他国よりはるかに長く続いたと言う。一つの理由は、日本女性の勤勉さと熱心さであったとする。もうひとつの理由は、1876年（明治9年）に神官の Tatsuchi Gaun がチューブスピニング（tube spinning= ガラ紡績）を発明したことだった。これは紡績機の前身になったもので、いわば資本不足の下での日本流の巧妙さを発揮したものであった。これによって女性の生産性はいっぺんに15倍になった。ただ、これでも水車による紡績が始まるととても太刀打ちできなかった（船に紡績機を置いたものも多かった）。このような素朴な部門の産出高は1930年代まで成長を続けた。それは、部分的には資本コストの低さ、低賃金、そして、荒っぽい紡ぎ糸をカーペットやネル、足袋の底などに使ったからである。——このようにランダスは微に入り細を穿って、明治時代の産業革命の中身を述べる。

1886年から1894年（明治19年から明治27年）までの間に、32の新しい紡織機が備え付けられ、その半分以上が大阪の周りでの出来事であった。1886年から1897年（明治19年から明治30年）の間に、織り糸の製造は全体で14倍になり、1,200万円から1億7,600万円にまで増えた。1899年（明治32年）までには日本の紡績機はおよそ3億5,500万ポンドの織り糸を製造していた。1913年（大正3年）までにはこれが6億7,200万ポンドまで上がっていた。この効果として、輸入はなくなり、輸出が始まる。1886年（明治19年）段階で、織り糸の国内消費量のおよそ62パーセントは国外から来ていたのが、1902年（明治35年）までには、織り糸の輸入はほとんどゼロになっていた。1913年（大正2年）までには世界の綿糸の輸出の4分の1が日本からのものになっていた。日本は——インドと共にとも言われるがそれ以上に——、英国の第三市場の大なる驚異となっていた。

綿を紡いで織るのと、それを機械で織るのとはまったく別のことであった。綿紡ぎというのは、近代産業への入り口としては比較的たやすいものであった。これは、カタロニア（スペイン北東部のフランスと地中海に接する地方）、エジプトおよびブラジルが早発の成果を見せたことから分かる。普通はイギリスの製造業者から機械を買い、そこから技術者を送ってもらい、必要なら継続して織れるようにしてもらうことができた。こうした織り機は国内の手織り機に供給し、手品のように、必要な行動はとれて、産業革命の似姿がここに登場した。

日本では、初期から、消費者向けの物を越えたところに行くことを決意していたとランダスは日本の場合を分析する。もし近代的経済をもちたいと思ったのだったら、機械やエンジン、船や機関車、鉄道に港湾・造船所などの重工業のあり方を身につけることが必要なのであった。ここで政府が決定的な役割を果たした——海外におけるものの下検分をし、外国の専門家を招く、装置を作る、そして、民間のベンチャーの助成金を支給するなどしたのである。しかしこれより重要だったのは、日本の愛国者たちの能力と決意であった。国のためには自分の生涯の道を変え、特に日本の職人たちが手工芸品でもっていた緊密なるチームワークと監督とによって、すぐれた技術・態度をもっていたことが大きかった。

竹中訳では、ここを「政府はここでは…傍観者のな役割を演じているだけだった」（319ページ）とし

ている。念のため、原文を出せば、“The government played a critical role here, financing reconnaissance abroad, bringing in foreign experts, building installations, and subsidizing commercial ventures.” (p. 380) とある。

この遺産は、迅速な学習という形で成果をあげた。水車の産業のための活用は、徳川時代の末期になって*ようやく行われた。とくに繊維産業に利用された。しかし、水力というのはヨーロッパやアメリカの工業におけるほど重要ではなかった。というのも、日本人はどんどん先に進んでいたからである (p. 380)。蒸気の技術がすでに入手可能であり、すぐ後には電力が待ち構えていた。電力はとくに小規模で分散した軽工業に適していた。電力ほど、少量のエネルギーでも供給できるものは他にない。もちろん、電力のためには大規模な発電と配電が必要であった。これは都市部では問題にならなかったが、鉄格子を越えた遠隔の田舎地方では内燃機関がこれを行った。

*竹中訳で、「…水力は、徳川政権が倒れた年に初めて、特に繊維工場に取り入れられた」(319ページ)となっているところは、原文では… Waterpower for industrial use did not come in until the last years of Tokugawa, when …(p. 380)となっている。原文では the last years of Tokugawa と、year が複数形になっている。「徳川政権が倒れた年」というのは「その特定の年一年」のことを言っていると考えられる。細かいことではあるが、日本語では名詞の単複を明らかにすることは、その必要性がなければ、ないのに対して、英語では、これを常に明示する。翻訳（あるいは通訳においても）その違いを意識することはきわめて重要なものではあるまいか。

日本はそれから第2次産業革命に進み、その経験のなさを裏切って、蒸気にまだ慣れないうちに、電気を発電し、それを活用するようになった。ランダスはこのように電力を利用しなかった例外として、ここで化学産業を脚注で挙げ、まだ国の力にとって決定的に重要だとは見られていなかったとするが、日本の経済政策が完璧で一貫性のあるものであったと期待すべきではないと、注意を促している（この点について楽観的にすぎる判断を示しているものとして、Okimoto, *Between MITI and the Market* を挙げている）。

日本で最初にアーク灯がついたのは1878年（明治11年）であった。この実験に携わったのは藤岡イチスケで、彼は Kōbu University（工部大学校＝工部省直轄の工学教育機関。明治4年に設立された工学寮を、同10年に解消したもの。同19年、東京帝国大学に合併し、帝国大学工科大学となる）で教員をしていた。彼は研究と実務の双方をしていたことから、大きな発電所が必要なことを見ていて、民間の支援を求めている。最初に働きかけ

た実業家がこれを断ると、出身地が同じで、高位の、ある官僚に近づき、彼が藤岡とともにベンチャーキャピタル立ち上げ、その後、64人の投資家（かつての貴族、公的なコネクションをもった商人、それに豊かな地方の商人）の企業家連合（シンジケート）を創設した。こうして東京電灯会社(TELC)ができた。はじめは工場や企業、それに造船所のために、小規模の民間電力・電灯会社を作った。その後、1887年（明治20年）から一般市民にも電力の供給をするようになった。この年に同様の会社が神戸・京都・大阪にでき、その2年後に名古屋と横浜にもできた。1896年（明治29年）までには全部で32社が立ち上がった。そして、1920年（大正9年）までには民間の電動モーターが、日本全体の製造業の必要量の52.3パーセントを担っていた。これをアメリカの場合と比較してみると、1919年には31.6パーセント、1929年になってやっと53パーセントに達した。イギリスではもっと遅れていて、1924年に28.3パーセントであった。ということは、エネルギーと動力に関しては、日本の企業は追い上げモデル（catch-up model）を裏付けることになったわけである。後発組はもうかるのである（“It pays to be late.” P. 381）。

日本が成功裏に急速に工業化したことは、伝統的には称賛されているが、これには、陰気で強烈なナショナリストが付きまとっていた——これで開発のプロセスに意味があり、喫緊のものとなったのであるが——。このことから、嫌悪感によって、多少、その称賛が差し引かれてしまっている。これが、産業化を遂げた最初の非西洋の国であったし、今日に至るまで、遅れて花を咲かせる国にその例となっている。他の国では若者を海外に派遣して新しい道を学ばせたのだが、彼らを失ってしまった。日本の国外在住者は故国に帰った。他の国では海外の技術者たちを国に招いて、国民に教えてもらおうとしたが、日本人は主として自分たちで学んだ。他の国はいろんな機材を輸入して、できるだけこれを活用した。日本ではこれに変更を加えて改善し、自分たち自身で新しいものを作っていた。他の国は、それなりの理由があって、日本のことを好きになれないことがあったかもしれない（どれだけのラテンアメリカ人が *gringo* を好んでいるであろうか？ とランダスは問う）。ここで *gringo* と言っているのは、《通例軽蔑的に》〈中南米・スペインで〉外国人、（特に）米・カナダ人のことを指す。しかしラテンアメリカ人は羨ましがり、称賛

はする。

これはいい話である、教化・啓発してくれる話だと言ってもいい、とランダスは続ける。でも、日本人によるこのような達成のあるひとつの側面について、褒めたたえる歴史家たちが見逃していることがある。それは、これを可能とした苦痛と労働である。初期の産業化の記録は例外なく、低賃金での過酷な労働によったものである。搾取 (exploitation) なんて言うまでもないことである。私ランダスはこの最後の「搾取」ということばをマルクス主義者たちの言うように、その製品以下の給金しかもらわれないという意味（これなくしてどうして資本がその見返りを受け取れるであろうか）でなく、「ノー」と言えない人を強制して働かせることの意味で言う。女・子供たち、奴隷・半奴隷たち（強制的に働かされる年季奉公人）のことである。ランダスはここで、脚注をつけてさらに次のように説明する。

マルクス主義のこの用語ほど、社会科学の中で誤解を招き、乱用されている用語はない、と。これは、世界中で使われ、逃れることのできない賃金労働の条件について言う用語である。資本主義経済だろうが、社会主義経済だろうが、関係ない。だから、他の経済と区別して使える意味をもっているわけではない。搾取率を数値化しようとして、賃金を製品価値で割る（賃金が払われる時間を総時間で割る）が、これは、変則的に、進歩的かつ革新的な資本主義者——装備と工場に投資して労働の生産性を上げようとする人たち——をその企業のためにより搾取する者に仕立て上げるのだ、と。

たとえば、イギリスの産業革命の文献をみると、虐待や酷使の話にあふれている——とランダスは本文で続ける。こうした話の中でも特に残酷なのは、いわゆる parish apprentices（教会区の徒弟）と呼ばれる人たちである。これは、繊維工場につけられ、納税者の welfare burdens を軽くするという役目を負わされた者たちである。しかしこれは繊維工場でおこなわれただけでなく、炭鉱はまさに悪名高きところであった。さらに、小規模の冶金工場、それに田舎家での仕事も同じであった。「5歳のとき、母がレース編みの学校（なんでも「学校」と呼ばれていた）に連れていき、そこの女主人に1シリングを渡したんです。この先生、30分ほどわたしの話を聞き、その後、頭を6回ほどぶん殴り、わたしの鼻を針にこすりつけたんです。」きびしい親方と親が共謀して、早熟な子供を奴隷状態に置いたのである。「6歳が最高よ。ぶん殴って教えることができるか

ら…。他の仕事をしていて、これより大きくなってから来たら、それまでの生活のことをよく覚えているからたいへん」。「怖がれば怖がるほど、うまくいく」というのがあるレース編みの歌であった。

今日のお仕事は編み針3本
お母さん、何と言うと思う？
これ以上はしてないと知ったら
外に追い出されるわ
絶対にもう中に入れてなんてもらえない

この歌は、Landes, David S., 1986, "What Do Bosses Really Do?" *J. Econ. Hist.*, 46, 3 (September): 5931 からの引用だとされる。上は、詩的な感受性ゼロの筆者の訳である。紡績工場における女工たちの悲惨な様子を記したものとして筆者が最初に思い出すのは細井和喜蔵『女工哀史』（1925年、改造社刊）であるが、これには英訳がないのであろうか。

これら不幸な子供たちのもっともよくかかった病気は胃の潰瘍であった。多くが性的奪略者たちの犠牲になった後、娼婦となっていったのにも、それほど驚かない。それが昇進のように見えたのだから。

イギリスの産業革命の社会的なコストは高かった。これは、産業革命の準備ができていなかったこと、そして、賃金と労働条件は関係する者が自主的に決められるという、驚くべき考えを反映している。このような錯覚をイギリス人が克服するまでは、彼らは働く場所に介入して、労働者を守る法律を導入することはなかった。初めに児童労働者を守り、続いて女性労働者を守ることになった。この保護をしたときには、彼らはすべての事情を書き残したので、社会史家たちはその研究資料として、報告書・証言の図書館と言ってもいいほど多量の資料を得た。そして、英国はこれらの記録にあるほど、ひどいものだったのであろうか。あるいは、記録がよりちゃんとしている——ということだけなのであろうか。

英国に続いて近代産業への道を行ったヨーロッパ諸国では、それなりの労働問題・スキャンダルをもっていた。ただ、それほど深刻ではなかった——それは、これらヨーロッ

パ大陸の国々は前もって警告を与えられていたし、事態を予測して保護策を導入することができたからである。これに比べると、日本の場合は、生の、奔放な資本主義に突進したことになる。イギリスと同じで、いや、それ以上に、家内工業がすでに恥ずべき搾取の現場なのであった。ここまで来てランダスは、「ここでなぜわたくしがくそれ以上に」と言うか？」と問い、次のように答える。——それは、日本で内職をする労働者が、英国だったらもっともおとなしい労働者でさえ暴動をおこしただろうと考えられるような単調かつ骨の折れる仕事でさえも我慢したからである。たとえば日本の労働者は休日、いわゆる安息日がなかった。どうして休日なんて必要だったのか？ 動物に休日はなかった。労働の供給曲線が、一定以上の給料になると、供給量が減るといって、後屈供給曲線ではなかったからである。つまり、給料が上がっても、労働者が仕事を休んだりして、余暇を優先することを心配することはなかったのである。

ランダスはここで、Animals did not get a day of rest.(p. 383) と言っている。「動物たちなんて、一日として休息の日はなかった」というのである。これほどまでに酷使されていた日本人のことを＜動物＞だって？ 筆者はここを何度も読んでみた。その日の夜は結局、ほとんど寝られなかった。彼はすでに2013年8月30日に89歳で他界している。すでに、the great blue yonder にいる。筆者ももうすぐここでランダス大先生に会えることになるかもしれないが、それでも、そこで、「先生、あれはちょっとおかしかったのではなりませんか？」と訊けるのだろうか。ひょっとしたら、「お前はそんな読み方しかできないのか。もう、オレの本を紹介するのは止めてくれ」と言われるかもしれない。そして、これまではこの本をおもしろく、納得して読んできた。今さらここだけを捉えてその偉い先生に文句をつけられるのか…。筆者が読み間違いをしているのかもしれない…。朝5時すぎになって布団から起きると、目の下におおきな隈をつけて、ゴミを近くの収集所まで運んで行く。途中で電線に何匹ものカラスがとまっていて、「アホー、アホー…」と筆者に向かって怒鳴っている。半時間ほど歩いて汗びっしょりになって家にたどり着いた。

それでは、どうしてこのようになったかを、ランダスの言うところから見よう。一つは、集団の責任感というものが強かったからであったとする。筆者は、この集団とは部落のことだと見る。40年ほど前にここに引っ越してきた当時は、筆者の家族は「よそ者」と呼

ばれていた〔近藤正臣、2018、「大塚先生・大塚史学とわたくし」、梅津順一、小野塚知二編、2018『大塚久雄から資本主義と共同体を考える』（日本経済評論社、2018）、276-277 ページ〕。無精でわがままな労働者は自分自身だけでなく、家族をも傷つけることになる。そして、国家をも傷つけることになる。国家のことを忘れてはならない。ただ、ほとんどの日本の農民や労働者たちは、かつてはこんな風には考えていなかった。徳川幕府の下では、彼らはほとんど「国」というものを意識していなかった。天皇と国というものに対する、より高い責務を意識させるところに、新しい帝国の重大な仕事があった。学校でもかなりの時間が「修身」の授業に費やされた。通常の宗教の時間のないところでは、学校こそが美德と道徳の殿堂なのであった。1930年（昭和5年）の、とある教科書にあったように、「修身齐家治国平天下」なのであった（「天下を治めるには、まず自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、次に国家を治め、そして、天下を平和にすべきである」）。そして、貯蓄し、浪費をしないことであった。

ここに、ウェーバーの言った〈プロテスタントの倫理〉の日本版があったとランダスは再び言う（日本人の精神を論じた拙論「ランダス著、竹中平蔵訳『強国論』再論 3 ランダスの日本論A」参照）。そしてここでは、先祖返りをした農民の価値観 (atavistic peasant values) とうまく一致し (jibe) たためにそれだけ効果的であったとする。古典的な農民は miser (= 守銭奴、けちん坊) であった。すべてのものを貯め、計画し、それに従って働く。彼は仕事のために生き、その仕事によって自分の持ち物を増やす。これが彼の存在の理由なのであった（イギリスの家内工業の労働者を早い時期にその土地・農業から離れさせたのは、産業化には有利なことであった。しかしある意味では、その態度に関する面では否定的な効果ももった。土地なしの産業労働者は生きるために働く。しかし十分に稼ぐと、今度はエンジョイするために、働かなくなってしまう）。

日本人はこのような貧農のメンタリティーを極限まで押し詰めた。これは昔のことで、とっても貧しい社会なのであった。やっとのことで貧しいかつかつの生存を絞りだしていたのだ。お米で生き、寒いところでは、雑穀や蕎麦粉に頼っていた。江戸初期の慶安時代（後光明天皇年号の時代）の布告（1649年＝慶安2年に発せられた）は、百姓が自分で育てた米を食べることを禁じ、雑穀・野菜などの粗食に耐えるよう、命じていた。動物蛋白はほとんどゼロで、鶏少々に魚があっただけ。魚はその頭、皮、骨、尾などすべて食べた。

魚はそもそもそれほど多くとれなかった（いわば海を掃除するようにして、海藻・プランクトン・潮に乗って現れるわずかな獲物をとっただけであった）。現在でさえ、日本人は往年の即席の料理と欠乏の証しとなるような味に対する寛大さを示している。——ランダスには、今の日本人の食事がこのように映っていたのだ。

すべてのものを勘定に入れるのだ。用を足しなくなった？ 急いで家に帰り、自分の土地でするのだ。分業だって？ お母さんの労働力はとっても大事なものだだったので、赤ちゃんの世話をしたり、自分のしたいことをする時間はなかった。お産を終えたらすぐに起き上がって…。年上の子は幼い子の世話をする。——これは、貧乏な家の長男であった筆者もしたことでした。幼児も早くから仕事の手伝いができるよう、育てられる。糸くずでさえ大事にし、古着屋にほんの2、3銭であるが、売ることができた（100銭＝1円であった）。こうした事ができなくなってしまった老人は、ただで食事をするだけだとされ、はやくあの世に旅立ってもらった方がよかった。——このような一家が繊維工場の縮図であった。やり手の問屋制家内工業者には儲けの山のようなものであった。

最後にランダスは、このように馬車馬のように働くある人物の個人的な話をだす。ある孤児の少女が才気のある農民と結婚する。この農民はなんとかして兵役を逃れたかったので、妻が必要なのであった。ここでランダスは脚注をつけて、この話の出自を明かす。それは、半ば公式の散文詩「ふきのとう」（作者は農村改革を進めた左翼の闘志山下ともえ）で、マルクス主義の労働組合オルグで、「危険なる思想の持主」ということで1940～1945年に投獄されていた。本文に出てくる女性の話を知ったのは獄中のことであった。本文での話は Mikiso Hane, 1982, *Peasants, Rebels, and Outcasts: The Underside of Modern Japan*, pp. 85ff (New York: Pantheon) から採っている。日本の経済史研究者はこの本にもっと注意を向けてもいい——と言う。竹中訳にはこの部分の邦訳はない。

ではこの話に戻ろう。この女性は結婚によって、亭主の兵役免除をかちとったこと以外、86フィート（約25メートル）ほどの深さの井戸から水を運び出すことのできる体力、異常なほどの手と指の器用さ、謙虚さ、そして地獄から来た義母の前で発揮した聖人のような我慢強さくらいしかなかった。義父は仕事しかしていなかった。「わしは何も見たくない。趣味なんて何もない。土壌をよくして収穫物をよくすること——人生で、それ以外の

楽しみはないわい」というのである。

ランダスは再び脚注で慶安の布告に触れる。「農民は早起きをして、畑を耕す前に草取りをすること。夕方には、麦わらをより合わせて綱あるいはかごを作ること。…夫は畑ないし田んぼで仕事をし、妻は機織機で働かなくてはならない。双方は夜なべをしなくてはならない…」とあるという。Leupp, *Servants, Shophands*, p. 7. より。

義母は嫁いできた女性に直ちに言う——「わしは懸命に仕事などするつもりはないし、若い妻にのんびり暮らさせるつもりもない。お前はこの家族の一員になったのだから、ちゃんと働いてもらう。わしと一緒に、ケチに徹し、節約をしてもらう」と。息子の妻にまず機織機に座らせ、商人がくるのに合わせて布を織らせ、彼女と3人の義妹は朝早くから（明るくなる前から）真夜中まで、毎日毎日、寒くても暑くても、飛び杼（たて糸の間を往復してよこ糸を通すもの）を飛ばせた。宗教上の安息日なんてないし、休日もない。あたりをきれいにする時間もない。『いいかい、ここはお寺とか医者の家じゃないんだからな』と鬼婆はしかりつける。「家を掃除する時間があるくらいなら、外に出て、働きなさい」と。そして彼女たちは実際に働いた。一日に、縞のある布を3反は織る。イギリスでこれに近いだけの仕事をした者なんて想像もできない。時々、他の農家の家族のために織物をするときには布を引っ張って、自分たちのために1エル（かつてイングランドで使われた布地などの長さの単位で、およそ45インチ=1.14メートル）くらいをやりくりして不足分を補ったものである。間違いなく、みんながこれをしていて、義母はこのような＜特別のもうけ＞はかならず商人に行くようにした。若い女には楽しみや道楽は禁物なのであった。隣人たちは、この若い機織女を、家族のための＜財布＞と呼んでいた。このようなお金は義母がすべて自分のものにしていて、

この義理の娘は、家内で最高の織り手であった。いや、村の中にもこれほどの織り手はいなかった。これは義母でさえ認めざるをえなかった。と言っても、苦情をいう理由はちゃんと見つけていたが。義理の娘が出産した時も、誰もこの娘を甘やかすような者はいなかった。3日間もふとんに横になっていられなかった。きゅうりの漬物1本で一日やっていかななくてはならなかった。そして、誰も＜よくやったね＞なんて言わなかった。母親の当然の役目だろ、そんなことは…。そしてこの若い母親は一日一食しか与えられなかった。女が赤ん坊をあやしていると、義母は「あんなことして時間を無駄にして…いやだね

え」と言い、さらに「わたしは、若い妻が赤ん坊にお乳をやっているのは、本当に見たくないね。機織機での仕事があるだろうに。そしたらお金ももうかるだろうに…」。

必死になってよく働けば働くほど、彼らはさらにしほりにしほり、彼女に自分の時間なんて与えようとはしなかった。当然のこと、こうして彼女の限界価値はどんどん上がっていった。

さらにランダスは続ける。万が一、彼女の下着が汚れていたらどうだというのであろうか？ 彼女の夫は今やその場にはいず、北朝鮮の国境守備隊に入って、なんとか後々の年金を得ようとしていた（これがいくらわずかなものであろうと貧農には年金を受け取るとは夢であった）。だから、口うるさいことを言う必要はない…（彼が日本を出た時、いつまで朝鮮に行ってくるのかは、彼女には何も言わなかったが、実は24年間、留守にしたのであった）。

よって、残された家族は銭単位で節約し、前貸し制度で動いていた連中は円単位の利益を稼いでいた。この間に、日本の繊維産業は大いに栄えた。やがて、この家族は多少の財をなしたので、家を新築しようとすることになる。今度は屋根にはちゃんと瓦を敷こうとした。つまり、家にはなにか重要なものがあるのか？ 「この世界では、家こそがすべてなのである。家こそが、その家族の社会における地位を決める。その人物の真価を決めるのである。」たとえば医者家を呼んだとすると、あなたの脈をとりながら、家全体の様子をよく見る。葬式に僧侶を呼べば、家全体を見て、それに応じて、死者を冥界のどこに置こうかを決める。嫁いできた者たちは、この他のことについて話すことはできない。これまではいつも見下げられてきていた。周りの人々は、礼儀云々なんてこともなかった。そうだな、ここで目に物見せてくれよう。そして義理の娘はひとりで編むだけであった。義理の妹たちはみんなどこかに嫁いでいた。そして彼女は痩せる一方であった。結局、4人のために働かなくてはならず、食事には時間がかかったのだ。ただ、自分の息子だけは育てていった。夫は朝鮮などと言うところ行ってしまって、金の筋の入った制服を着ていて、自分のことなど覚えていなかったから、息子こそがせめてもの慰みなのであった。

しかしこの少年はやがて学校に行き始めた。その母は、彼がスポーツに加わるとか学校の演劇を見る時間はゼロであった。そんなことをしたら、機織機から離れてしまうことに

なる。先生が家庭訪問をした時には、義母が「となりの部屋で座って、静かにしていなさい」と言う。なぜって…。彼女の知っていることと言えば機を織ることだけで、おかしなことを先生にいたりすれば、息子の恥になるからである。やがて息子は卒業して、他の子供たちと共に歌った——「ほくらが感じる幸せより大きなものはない」と。母が学校に行ったのは、この時が初めてで、最後でもあった。春には庭は桃の花盛りであった。そして、その後でさえ、桃の花が咲いているのを見るだけで、あるいは、子どもたちの卒業式の歌を思い出すだけで、母は涙を隠せなかった。

こんな様子で、母は織り、商人が買い、義母がお金を貯め、繊維産業は栄えた。「人はこんな様子で、繊維産業は栄えた」と言われてみると、筆者はどうしても講座派对労農派の論争を思い出してしまう。単純化しすぎるかもしれないが、労農派は、明治維新をブルジョア革命と規定し、日本資本主義の半封建的・絶対主義的な性格を否定し、当面する革命はだから社会主義革命とした。それに対して講座派は、明治維新を不徹底なブルジョア革命として、半封建的な農業関係の規定的意義を強調した。これは『百科事典マイペディア』による。さらに、息子は中学に進学した（明治40年までは尋常小学校は4年間の義務教育であり、その後6年になった）。進学こそ、朝鮮で警察署長をしていた夫がこれを望んだからである。母は息子を送り出すと、校門を登って、その上から首だけを出して、近くを走る電車が見えなくなり、その音も消えるまで、そこで見ていた。

そして、夫はそれでもまだ帰らなかった。彼は新築の家を建てるような特権をもってはいなかった。でも、彼らは平気で家を建て、親戚の者たちはお祝の手土産をたくさんもってきた。義母はにこにこしており、土産をたくさんもってきた者にはへつらうのであった。他の者には？ 自分の子供で親戚の者の気前のいいのに返礼をしている者にでさえ、一言の返事もしなかった。彼女の義兄は金持ちで、牛の売買をしていて、多くの物をもってきた。年寄りの祖母を遠ざけると、こんなことを言った——「この年寄りさん、まだ生きていたんですね。あなたはたいしたことをしてきてないじゃないですか」と彼が言う。お金を儲けて、田畑を買い、家をつくるお金を払ったのはあなたの義理の娘ではないですか、と言った。老婆は大笑いし、うなずいた。牛の売買人は大声をだした——「あの人は耳が聴こえなくてよかったねえ」と。そこで老婆は自分の義理の孫（織りをしていた）に

すべてを語った（他に話のできる者がいたであろうか?）。「あの人の言ったこと、聞いた？ わたしは、いい気はしないね」と言う。ここで義理の孫の女の子がこの老婆を慰める——「おばあちゃん、何も気にすること、ないのよ。あなたほど一所懸命に働いた者はいないんだから。わたしが機（はた）から降りずにずっと織り続けられたのは、おばあちゃんがわたしのためにつむ（spindle）の上で糸を紡いでくれたからなのよ。紡いで儲けたお金が家を建てる方に行ったじゃない。もちろん、おばあちゃん、そんなこと、よく知っているわよね。しょげることなんて、全然ないのよ」と。彼女は義理の祖母の手をとると、泣いた。老婆は言った——「お前の言ってることって、いい気分にしてくれるね」と。この後、しばらくして祖母は死んだ。祖母は枯れた木のような体をしていた。

そしてここで夫の〈ういち〉＝原文では Uichi としかになっていないが、いちおう、もっとも一般的な漢字をつかって〈宇一〉とすることにしよう＝が帰ってきた。金の筋の入った制服を着て、金縁のめがねをかけ、口ひげは上を向いていた。そして彼は、家に建て増しをした。しかし彼はその後、家には戻らず、町に行ったまま…のことが多くなった。噂では、ある女性といっしょだということであった。そして、町での滞在はじょじょに長くなっていった。そして、噂は正しかった。宇一の妻はこれについて訊くのを怖がった。すぐに彼がかつとなるのだった。しかし、部落ではこういうことはずっと秘密にしておくことは困難であった。

それに、宇一も何も隠そうとはしなかった。彼はこの女性と朝鮮で知りあっていた。この女は日本人で、朝鮮に来たのは「ホステス」として働くためであった。ここで政府の高官が彼女を mistress とした。彼女はこれで金持ちになり、この高官のおかげで自分の家族も豊かになった。そして今や、彼女はこの村にやってきて、宇一の lady friend として認められることになった。このような部落では他の女性にはありえないことであった。彼女は絹の着物を着て、しかも、毎日、着替えをしていた。しかも、ベッドのシーツも絹であった。そして宇一は自分の妻には我慢するなんてことはしなかった。すぐにぶん殴るのだ。彼の両親もここでは一切の介入をしなかった。それどころか、彼の父は息子の残虐行為に喜んでいて——「このような精神力を持たなければ、世界に出て、前に進むなんてありえないだろう」と。彼の母もこれに賛成した。「あんなふうにして朝鮮人を脅かしてい

たんだらう。彼のことが怖かったのも、当然のことだったらう。ほんとうに荒々しくもなれるんだから…」と。

そしてある日、宇一はお妾さんを家に連れて来た。豊かな胸を見せつけ、高価な絹の着物を着ていた。かれの母はその計画を知っていたので、義理の娘に建て増しをした部分を掃除するよう、言いつけた。しかし、新しい畳を拭き始めると、宇一がそこに駆けつけてきて、彼女を外に蹴飛ばした。「このけだもの野郎！ お前の霜焼けにかかった足で、畳の上には上がるとは何事だ！」と。驚いた彼女はよろめいて、自分の息子——遠い中国にいる——を呼んで、「みいい、みいい、お前はいまどこの戦場にいるんだ…」と呼んだ。彼女の義母が追い出した。「出て行け！ 気狂いめ。お前には何の用もないわい。」…と。「あいつらの、機からの所得なんてもう要らない。」ということであった。

近所の女たちは、このことをよく理解した。「あの人は、朝鮮人に容赦なくあたって勲章をもらったんでしょ。金持ちになるために、うさんくさいこともしたのよ」と。そんなことをしていい結果にはならないわよ、とこの女たちは言った。しかし、これらの女たちは宇一の妻が、嘆き悲しみ、しくしく泣いているのを見ても、相手になろうともせず、同情を寄せることもなかった。夕方に近づくと、宇一の情婦とその女中が町から人力車でやってきた。情婦は真っ白な絹の靴下をはいていた。これも日本の機の製品であった。宇一の妻が覚えているのは、別館の中から笑い声が聴こえるようになったことだけだった。

こうして——彼女は家に放火した。日本の家は燃えるのが速いし、大きく火を吹く。だから、この女の箆箆や着る物も、絹の着物も救い出すわけにはいかなかった。そして、紙幣はどのくらい燃えてしまったのだろうか。そのあと、宇一の妻は深い井戸に滑り込むと、この世から消えた。しかし、彼らはその体を見つけると、生き返らせた。彼女は放火犯として裁かれ、これが灯火管制を犯したというので、罪はさらに重くなった。存在もしない中国の爆撃手にも準備を怠ることはできなかった。結局、彼女は懲役10年の刑を受けたが、酌量すべき状況があったとして、それが8年に減刑された。

面会のために刑務所を訪れた者はひとりもいなかった。冷たい壁に一人もたれて、寒い風を受けていた。雪が降っているのに、芽をだしたルバーブのことを詠ったくだらない歌を歌って、自分を慰めていた。子供のころ、病気の母のためにこのルバーブを摘んだことを思い出しながら。むすこのみいが監獄に手紙を書いたのは、ほんの一度だけであった。

その家の女性に残忍な仕打ちをする家族は、善行や感謝を重んじる男を育てはしない。彼女の歌を監獄で聴いてその話を覚えていたのは、同じ監獄部屋の山城さんであった。孤児の母と妻はともに50歳であった。

もちろん家内工業は古い歴史をもっていた。それに対して、加工関連の工場は新しかった。日本の産業革命を主導した部門は繊維で、絹、そして、何にもまして綿であった。綿の製造では新しい労働力が必要であった。イギリスと同じで、このような初期の mill hands はたいてい女性であった。ただ、一つだけ違いがあった。イギリスでの初期の工場では、子どもがたくさんいた。悪名高き求貧区の養成士たちがそうであった。日本ではそれほどではなく、明治維新後、義務教育制度を設けたので、原則として子供たちは工場の仕事はしなかった。ただし、ここでわたくしランダスが〈原則として〉と言うのは、現実はいさばい異なっていたからである。イギリスと同じで、日本でも子供の年齢を意図的にごまかしたり、学校に出席したかどうか、完璧な記録ではなかった。親はお金を必要とし、学校に行くのもただではなかった。

公平に言えば、農民の生活はあまりにも貧しかったし、あまりにもきつかったので、これに比べると、工場内での仕事は、比較すると、まだ良かった。田んぼでは水は冷たかった。なにしろ、深い井戸の底から来ているのだから。工場の寮では、熱い水も冷たい水も、寮の水道の蛇口から出てきた。寮の食事は簡単なもので、雑なものでもあった。人間用というより、豚にピッタリと言えた。工場はお米のご飯を3度、出した。たしかに、外国から輸入した米だったろう。日本人はみんな、ねばねばする国産の米を好んだ。しかし、その他の国では他国でできた米がいいと言っていたように、日本でも工場働く貧しい女性たちは、この米を、味もあり、栄養もあり、そして、癖にもなると思っていた。おそらく、今日の日本でお米の市場を海外に開放したらそうなるであろう。ランダスは日本の米市場の自由化も唱えていたのであろうか？

これらの工場での賃金はスズメの涙ほどであった。そこから食事代をとられる・寮での宿泊代をとられ、さらに父の借金返済までしていたから、何年もかからないと十分な貯金はできなかった（寮で寝る場合、多くは、機械と機械との間に、じかに床に敷いたわらぶとん、あるいは混雑した寮での簡易寝台に、畳1枚くらいのスペースしかもらえなかった

(これは3フィート×6フィート《およそ90センチ×1.8メートル》のひつぎくらいのものであった)。1898年(明治31年)に62のcotton plants 綿織物工場の調査が行われたが、これによると、女性の平均賃金は月4円5銭であった——これに対して男性は月6円83銭で、両者の平均は月4円67銭であった。インドの労働者でもこれより多くをもらっていた。いや、ほとんどその倍の給料をもらっていた。インドの主要綿織物工場7社の対等な賃金は、月8円7銭から9円18銭なのであった。

しかし、この話の核心は低賃金ではなかった。問題は marginal product 限界生産高なのであった。日本の労働者はよく働いた。新しい産業国家あるいは産業化前の国では生産性が低いとよく言われた。しかしこれは、日本については正しいとは言えない。農業部門が工場に人を解放した以上、工場主たちは2つの世界の最上のものを入手したのである。労働は安い、しかし勤勉であり、仕事には精を出し、集団のため、家族のためを思っていた。ある女性の記憶では…、

朝は、まだ暗いうちから、夜の10時まで、石油ランプのついた部屋で仕事をしました。仕事が終わったときには、みんな疲れていて、自分の脚では立てないくらいでした。夜遅くまで仕事が続いたときには、時々、ヤムイモをもらったことがありました。これを食べたんです。そしてそれから、洗濯をし、髪を洗って整えることなどをしたのです。こうなると11時にはなっていました。冬でも暖房なんてありませんでしたから、ごちゃ寝をするしかありませんでした。何人かの仲間が飛驒まで逃げて帰りました。わたしより前にここにいた者はもっと厳しかったと聞いています。最初の年は給料なんてもらえませんでした。2年目にわたしがもらったのは35円。3年目は50円でした。…女性の生活って、ほんとうにひどかったのです。[これは、[Mikiso Hane, 1982] の p.182 からとられている]

この引用からいくつかのことが分かる。低賃金、ひどい生活状態、個人として清潔さを保とうとする気概、そして、ゆっくりとした前進。さらにこれに、不健康な労働状況、加湿(静電気を防ぐためである)、リント(綿花の長繊維)がいっぱいの空気(これは結核を引き起こす)、耳が聴こえなくなるような絶え間ない騒音などである。バルザック(商

業道徳と企業の性格について書いている) がうまい表現を使っている——子供は、汚いオムツをせずにこの世にくることはない、と言うのである。産業国家も同じだ。なかには走って逃げた若い女性もいた。後から追っかけて引き戻し、仕事を再開する前に、罰と屈辱が待っている。うまく逃げ切った者もいたが、やがては戻ってきた。家族が戻らせたのである。あるいは、工場におけるひどい衣食住でも、それがなくて困ってしまったのである。

要するに、農業での生活・仕事の方が、最低限、物理的な意味では、もっときつかったということなのである。しかも、家族の忠誠心が最後には支配した。諏訪湖の周り（今日では電子産業がさかんである）の繭（まゆ）からの糸繰りに綿紡績工場などで働いたかわいそうな女性たちは、なんとかして、少しでも両親にもっていくお金を増やそうとして、深い雪のなか、油断のならない山道を、歩いて帰ったのである。途中では、底なしの谷に落ちないように、互いをロープで縛り合った。何年もたってから、このようなひどい年月について面接を受けた時、その多くの者はいいことだけを覚えていた。これも、いわば自然な、生存のための反応である——「私たち、苦痛は忘れるの。いいことを力説するの…」と。ギリシャ神話・ローマ神話にでてくるアイネイアース（トロイアの勇士で、Anchises 1 と Aphrodite の息子）はがっくり来ている同志たちに言った：“Haec olim mememisse invabit.” = 「この後にこのことを追想せば愉快ならん」と。（岩波書店『ギリシャ・ラテン引用語辞典』では、最後の語が *juvabit* となっている）。

男たちはもう少しよかった。まず、賃金が高かった。交渉力も大きかったからだ。日本はこの面ではヨーロッパで産業化を遂げようとした国々と変わるところはなかった。いや、少くともはじめの間は、ヨーロッパ諸国よりは悪かったかもしれない。日本では、工場労働者、いや産業労働者全体が、低い人種だと見られていた。これは、部落民のように社会ののけ者のように見られたということだ。いや、その多くがほんとうに部落民であった。——と言って、ランダスはふたたび脚注で以下のように説明する。——部落民と言っても、外から見ると、他の日本人と区別がつかなかったため、長い時間をかけてではあったが、少しずつ、大きな社会に溶け込んでいった。ただ、その多くがいわばスラム街・犯罪者の住むところに住み続けた。今日に至るまでも、日本人は探偵社や系図学者などを雇って、結婚相手がひょっとしたら部落民の出であるかどうかをチェックしている。これ

に対抗するため、当局は、ある種の公的記録を閉ざしてしまったところもある。このことについてランデスは、N.D.Kristof, "Japan's Invisible Minority," *N.Y. Times*, 30 November 1995, p.A-18 を参考文献として挙げる。

この部落民たちは、他のみんなとは別の存在であった、とランデスは続ける。「低い下級」とか、「劣位の」、「卑しい」、「負けた者たち」、「敗残兵」とか言われた。母親たちは子供たちに、工場労働者のことを「おばけ」と呼んで、自分の子供がこの泥沼に落ち込まないように、学校ではよく勉強するようさとした。

労働者たちは地位と尊厳を求めて抵抗した。実は、権利というより尊厳を重視した。「炭鉱夫をバカにしてはいけない」、「石炭は麦畑にはできない」とスローガンは言っていた。(そして、特に戦争中に炭鉱で働く日本人がいない時には朝鮮人や中国人を徴兵することができた。歴史上、何度もそうだったように、炭鉱夫はどれいなのであった。日本が1945年に負けると、これら奴隷たちはだまってこの仕事から去っていき、石炭生産——石炭は日本の主たるエネルギー原であった——は月300～400万トンから100万トンに激減した。言うもおろかだが、日本人を炭鉱で働かせることはもはやできなかった。*彼らはより良い生活に慣れていたし、自由であった。日本は、他の先進産業国家と同じように、やがてはこの問題を石油につくことで解決した。ランデスはここに脚注をつけて、次のように言う——日本は石油をもたないが、それを買うお金はある。ロシアは石油はもっているが、石油のburnerを設置するお金がない——あるいは、石炭を掘る炭鉱夫の給料を払えない。1996年12月現在、給料は7か月の遅延状態であった。

*ランデスの英語の問題：彼はこの後、They were used to better and they were free. としている (pp. 390-391)。下線部の意味が分からない。Better what? Better life? いちおう、この意味にとっておこう。

*竹中訳ではこれが、「石炭労働にもはや日本人は必要なくなったのである」としている (327ページ)。英語の原文は、…With Japan's defeat in 1945, these slaves just walked off the job, and coal production, Japan's primary source of energy, fell from 3-4 million tons a month to 1 million. Needless to say, one could no longer get Japanese to do the work (p. 390) とある。前後関係から見ても、英語自体から見ても、この竹中訳はおかしい。

近代化に向かって政府が音頭をとり、全員が一致してこれを成し遂げようとしたのと同じ時に、労働の倫理と個人の価値観のおかげで、いわゆる日本の経済的奇跡が可能になった。まるで、全日本人がかつての侍の価値観についてのようなものであった。武士道を平凡なものにしたようなものであった。もちろん、この信念が全国的にすべての日本人に当てはまると考えるのは間違いであろう。しかし、日本の戦後の実績を真剣に理解しようとするならば、どうしてもこれは、この、文化的に決められる人的資源というものの上でできたとせざるを得まい。西洋の技術を独創的に展開し、少しだけしかなかったものから多くを作った、他国であったならここで国民的サボタージュを行い、そこから出て行ってしまうところであったような国民が異常なほどの生産を行ったのは、まさに日本の persona なのであった。第2次大戦の終戦数か月前に日本兵が示した抵抗に思いをいたし、それを狂信のため、あるいは自殺衝動とする者は、ポイントを外してしまっている。この社会では、義務の意味、集团的義務の観念は、西洋で培養された個人主義とはまったく違うものなのであった。個人主義はたしかに、産業革命に先立つ数世紀において、経済的富を追求する数世紀前には、たしかに大きな長所であった。ここでいう産業革命とは、ヨーロッパだけで我々が見たものではなく、徳川時代の日本にもあったものとして、われわれが見たものことである。しかし、いったん日本が、自分たちの行きたい道を見た時には、彼らのもっていた集团的価値観はすばらしい、たいへんな資産なのであった（そして、とんでもない誘惑でもあった）。

これからの科学的歴史研究の共通の誤り——それは、今日の美德は明日の美德でもなくてはならないと前提とすることある。そして、一旦プラスの要因が与えられたならば、それは必ず pay するものとする事である。歴史はこのようには動かない。Start-up の必要性和 breakthrough 経済は、front-runner や cruiser と違う。日本の成功は、徳川時代の petrification と nostalgia との闘いをし、明治とその続きの下で国民的な努力を行ったことにある。状況が違ったところでは、異なった戦略を追求した。

ランダスは、世界には一方にとても豊かな国があり、他方、逆に貧しい国があることを歴史的に明らかにしようとして、1998年に本書を著した。筆者にはここから多くのこと

を学ぶことができた。ここまでは、主として、豊かになった国々のことを書いている。この後、24章 'History Gone Wrong' 以下では、豊かになれていない国々について論じる。世界の貧困問題は筆者の専攻分野でもあり、また、それにもかかわらず、アラブ諸国の事情については無知であるので、以下の章を読み、考えることをとって楽しみにしている。

ただ、ここまで彼が論じてきたことについて、いささかの異論を唱えたとすれば、ひとつにはこのような問題があるのではあるまいかと考えるので、それを指摘させていただきたい。それは、たとえばアメリカはもちろん豊かになった国であるが、Ronald Reaganが1981年に第40代大統領になってから、国内における貧富の格差が開いてきている点である。豊かな国においても貧困は存在する…ということである。これは、最近の日本にも当てはまると言えよう。

アメリカでは、最近の英語の表現に、I am a 99-percenter. という言い方がある。つまり、アメリカ市民の99パーセントは貧困で、「私はその一人だ」という意味である。そういうプラカードを掲げてデモ行進が行われたこともある。逆に、自分から "I am a one-percenter." と名乗る人はあまりいない。

こうなると、<世界の富裕と貧困>の分析ももう少し複雑にならざるをえない。「初めに豊かになれる人は豊かになったらいい、他の人もそれに続くだろう」という政策もありえよう。その途中で一部の人が豊かになって、それに遅れをとる人たちが反発する…ということもありえよう。もちろん、収入が増えれば、税率が上がり、納税額も増えよう。増えた分を貧困者のために使って、彼らの生活も改善しようというのが福祉社会の考え方であるとすれば、果たして現在のアメリカでそのような政策がとられているか、日本ではどうか…ということも問題となり得よう。しかし、実際にはそのようになかなかならない…というのが、福祉国家北欧の国デンマークでも最近の現実のようである。「新自由主義」の台頭を問題としてもよいかもしれない。

今年の猛暑の中でこの論文を書いている、もう一つ、どうしても指摘しなくてはならないと思われる点がある。

筆者には熊本に住む古い友人がいる。1960年代からの友人で、長年、熊本大学医学部で専門授業課目として生化学を教えていたが、今は大学教員を辞めて、野良仕事と自分で

呼んでいる仕事を熊本でしている三浦冽氏である。彼がメールでこんなことを言っている（7月25日付）。以下、三浦氏からのメールの引用である。

「熊谷市の日本記録達成ですね（これは、東松山市の北に境を接してある熊谷市において、7月23日に気温が41.1度となったことについて触れたもので、これは「国内観測史上最高」と言われる）。地球温暖化は否定のしようもなく、数年前までは、地球温暖化が杞憂であるというようなく評論家まがいや<エセ科学者>が息巻いていましたが、さすがに最近では沈黙を守っています。

この地球温暖化の問題については、数十年、いや半世紀さらに一世紀ほど前から警告されていて、温室効果ガスが突き止められ、そのうちの一つのフロンガス（オゾン層破壊の下手人でもあります）はすでに使用禁止になっています。もうひとつの下手人である二酸化炭素の削減は遅々として進んでいません。トランプ主導でアメリカは、その国際合意パリ協定から脱退しています。中国も及び腰だし、日本も積極的とは言いがたいですね。昔、タバコの発がん性に関しても巨大なタバコ産業からの圧力から同じような抵抗があったこととよく似ています。近く（熊本）では、水俣病もしかり。もしかすると、今の温暖化はすでに point of no return を超えているのではないかと悲観的にもなりかねません。暑いからエアコンをつけると、熱風が噴出してますます気温をあげますし、電気を使うのでそれだけ化石燃料を使い、熱と二酸化炭素を吐き出します。

これは経済学者の近藤さんの領域ですが、経済成長が宿命づけられている資本主義では、成長すればするほど資源・エネルギーを使います。その結果、温暖化に拍車がかかります。資本主義が席卷している現世界では、みんながみんな経済成長を目指しています。その結果、資源とエネルギーの無駄使いが進み、温暖化が加速されます。この地球規模の経済活動を根本的に変えない限り、温暖化減速は無理ではないでしょうか？

人間は単一の種として繁栄し、地球を我が物顔で支配しようとしてきました。その間に何百億かそれ以上の生物種をすでに絶滅に追いやり、資源を使い尽くそうとしています。いまのままだでは、いずれそれほど遠くない将来には石油は枯渇するでしょう。今の、地球規模の危機を解決するには、科学者、技術者だけではとうてい無理で、経済学者、政治家、社会学者、人文科学者らが寄ってたかって取り組む必要があります

ます。いまの状態ではとても可能とは思えません。このまま、破滅に向かうのでしょうか？」

このような規模の大きな問題のことを考えると、世界の歴史を豊かな国と貧しい国という対比で考え、もちろん、世界の国々が豊かになるのが望ましいと単純には言えなくなる。

参考文献

Craig Shirley, 2011, *December 1942: Days that Changed America and Saved the World* (Nashville, Dallas, Mexico City, Rio de Janeiro, Thomas Nelson, 2011)

近藤正臣、2015、『通訳とはなにか：異文化とのコミュニケーションのために』（生活書院）